

クリフ・マイルズ

## もくじ

### 第一部

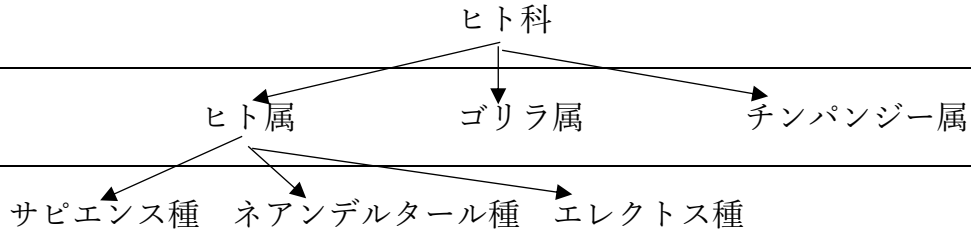
原書のページ数

ナスカ異星人を生物分類の種、属、科より下位に分類	1
--------------------------	---

(訳注：次ページの系統図参照。つまりナスカ異星人を少なくともヒト科以下に分類するということ。文中ナスカ異星人を「新種」と呼んでいる。サピエンス種、ネアンデルタール種、エレクトス種に並ぶことになる。異星で進化した異星人を地球の生物分類に当てはめるのには無理があるが、著者はナスカ異星人の骨格が細部では異なるものの、それほどサピエンスに類似しているのだと主張していることになる。)

要旨	61
----	----

発見の経緯	67
-------	----

界	動物界
門	脊索動物門
綱	哺乳綱
目	サル目
科	ヒト科
属	
種	サピエンス種    ネアンデルタール種    エレクトス種

第二部 (訳注：CSETI のアーカイブでは省略されているので、本文なし。)

ベン・リッチ	81
ウィルソン・メモ	85
秘密の宇宙計画	119
UFO と核兵器	145
バイナリーコード事件：レンデルシャムの森、英国	163
バイナリーコード事件：ワドレイ・ジョージア、米国	179
マリア	189

UFO 写真	199
ロナルド・レーガン・ブリーフィング	221
ET 写真	243
状況評価	248

## はじめに

地球外存在の真実をめぐる活動している2つの勢力がある。

1つは異星人問題をコントロールしようとする勢力であり、この勢力は国家安全保障の名目で真実を隠蔽し続けている。彼らは人類が人工の円盤や、チックタック宇宙船やTR3Bアストラを所有していることや、星間宇宙飛行をしている事実が暴露されることを望んでいない。異星人が本当に実在することを知ると人々はパニックになると主張する向きもあるが、私はその主張は認めない。

もうひとつのグループは異星人問題の内情に通じている人たちであり、異星人存在の真実を知っており、労力を惜しまず情報を入手し、それを公に検証しようとする。

私は当文書の公開に関してはいっさい口をつぐむことにした。この文書が公開される

ことは誰も全く知らない。私は完璧な黙秘の必要性をリンダ・モルトン・ハウの意見から学んだ。彼女は自分が口にしたことをすべて把握されていた。そのことを彼女は把握している連中の1人から知らされたのだった。

恐竜研究の古生物学者である私が、世間が求めている検証結果の開示を引き受けようとしている。このことはちょっとこっけいだろう。化石の形で記録されている人類の祖先には、ペルー・ナスカで発見された異星人の姿に似たものはいないのだから。

私はこの検証開示のプロジェクトを成功させるために良い方法を編み出さないといけなかった。私が開示を決意したのは、異星人が実在することを科学的に証明できると思ったからだし、何十年にもわたって懸命に UFO 情報暴露運動をしてきた人たちが世間に伝えようとしてきたことは事実だと証明できると思ったからだ。私は広く世界中に異星人存在を開示するために最強の資料と思えるものを集めてこの文書を書いた。

私はこの文書と、私の経歴を知ってもらうための論文をいくつか入れたサム・ドライブ（小型メモリー）を50個以上配布した。私の人生の目標は出来るだけ多くの人に状況をよりよく理解してもらうことである。ウェブサイト [TheMilesPaper.com](http://TheMilesPaper.com) を作る事が最終ステップだった。このサイトがウェブにアップされてからすでにいくばくか時間がたった。そして当文書を求める人に私のサイトを通じてフリーで提供している。知り合いの人にこの文書をシェアすることをお願いしたい。

# ナスカ異星人を生物分類の種、属、科より下位に分類

クリフォード・A・マイルズ

米西部・古生物学研究所 元所長

私はレントゲン、CT スキャン、DNA 検査によって骨学的解明を行った結果、ナスカ検体は科学的に他に類を見ないものであり、地球起源でないことが判明した。

## 要旨

異星人を種、属、科レベルで記述。この新種は前腕の骨が一本である。人類の前腕には橈骨と尺骨という二本の骨があるが、彼らの前腕の骨は一本しかない。これまで発見されている人類の祖先の化石でこのような形態のものは一つもない。また地球上に生存している動物、またかつて生存したが人類によって絶滅した動物にもこのように前腕が一本しかないものはひとつもない。このような形態をもっているということだけでも、この検体が地球上で進化したものではないことを強く示唆している。しかも地球外の起源を示唆する形態はこれだけではない。

この検体は直立二足歩行であるにもかかわらず、頭骨は爬虫類と哺乳類双方の形態を合わせもっている。この生物の形態的特徴（体制）は人類のそれに似ているが、明

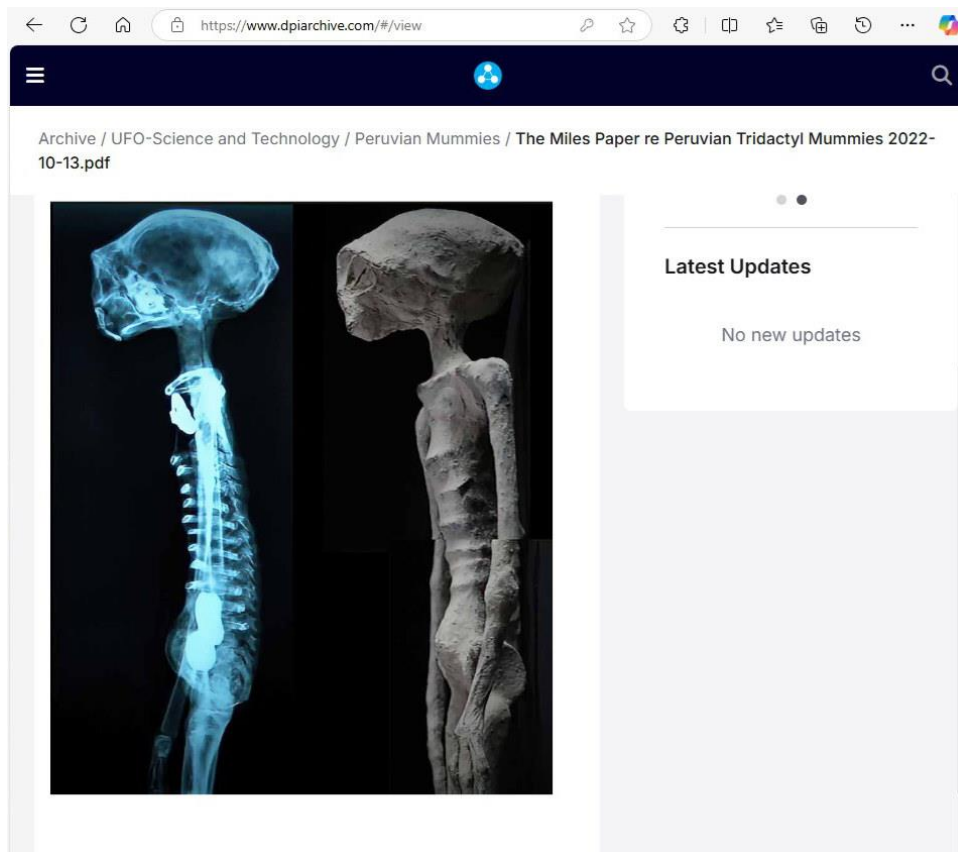
らかに異なる点もある。たとえば、人類の手のように親指が他の指と向き合うようには出来ていない。人類が進化によって獲得した理想の形態とは一致していない。彼らは数十年来目撃報告があるグレイ種族に非常によく似ている（訳注：著者はグレイがUSAPs がこしらえた人工 ET であることをまだ認識していないと思われる）。

## 序論

本論は 2016 年後半にペルーで発見された 6 体の検体に基づいている。そのうち 5 体は完全体である。1 体は頭部を除いた他の部分は全て揃っている。この頭部を欠いた検体と、体部のない 2 つの頭部とが DNA 検査に付された。この体部のない頭部は頭部のない検体から切り離されたものではない。なぜなら頭部のない座った姿勢の検体は首の部分に頭部がもぎ取られた比較的新しい破壊面があるのに対し、頭部だけの 2 つの検体は損傷がなく底の面が均質で凹凸がないからである。

ロバート・キャロルの『脊椎古生物学と進化』は大学の脊椎生物学科のための総論的文献として書かれた。これは地球上に記録が刻まれた脊椎動物の 5 億年以上にわたる進化をゼミで学ぶ際の参考書となっていた。進化の記録としての化石を調べることによって現代に生存する脊椎動物の異なる種同士の関連性を定めることができる。また主たる脊椎動物群それぞれの特徴を示す頭部の形態の起源を化石で追跡することがで

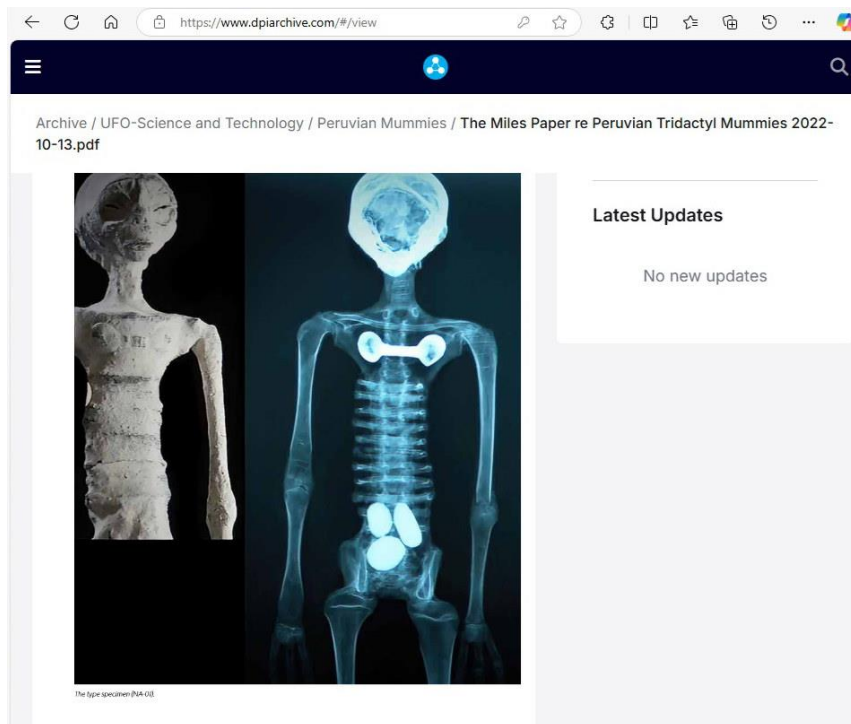
きる。しかし、私たちが手に入れた化石による記録は完全なものだろうか？いや、完全ではない。しかしこの分野を牽引する者たちが理解するところでは、何十年の間、新しい知見は生まれていない。



ある動物の骨格の形態はその動物のもつ機能を決定する。私たちが今回入手したヒューマノイド型の生命体は私たちが備えているのとそっくりな形態の鎖骨をもっている。この生命体の身体の基本構造、頭部、肩、胴、腕、脚は私たち人類のものと似ている。二足で直立歩行をすることが見て取れる。

この生命体は頭骨が細長く伸びており、その前面に目があり、歯はない。7番脊椎か

ら水平の肋骨が始まっている。前腕の骨は一本、下肢の骨も1本だけ、両手首も骨一本だけであり、くるぶしの骨はない。下肢帯はない。その代わり堆積した卵のための排出口がある。爬虫類に似た肌と指の爪をもっている。女性型の検体は57.7 c m (2フィート弱)の背丈。



この生命体の肉と骨が保存されて今ここにあるという事実を見れば、彼らの祖先は当然化石の形で見つかるはずだ。しかし彼らの化石が見つかっていないという事実から、彼らが地球由来ではないことが示唆される。古生物学の専門家として、この生命体の祖先にあたるような化石は一度も見たことがないと言い切れる。私は同僚たちにも尋ねたが、みな同意見であった。



銘記してほしいが、私は彼らの身体構造を畏敬の念をもって描写している。それは必要なことだと思っている。彼らは感情をもった存在であり、別の惑星から来ているのだから敬意に値すると思う。彼らが私たちより優れた知性の持ち主であることは確実である。

過去50年間は進化の相関性確立を目指す方法論の分野において革命的な時期だった。科学者たちは進化の速度や方向を決める要因について多くの新理論を提案した。それらの研究を特徴付けているものは、極性（進化による変化の方向）や相同性（構造の相似）を決める際に化石を使用していることだ。これは系統図（祖先から子孫へ繋がる系統）を確立するために無くてはならない重要な手段だ。

古生物学者は両生類から爬虫類へ、爬虫類から哺乳類へ、恐竜から鳥類への移行の主要な道筋をよく理解している。ペルーで発見されたこの生命体は明らかに有羊膜類である。有羊膜類とは竜弓類（爬虫類と鳥類を含む）と単弓類（哺乳類を含む）から成る四脚脊椎動物のことである。有羊膜類は胎児を保護する膜（羊膜）をもつことが特徴であり、幼生期がない。この特徴により、有羊膜類は卵を産み落とすか、または母体に蓄える。生命体のうち2体が卵をもっている。基準標本の生命体は明らかに3個の卵をもっている。すべての陸生動物は前腕に2本の骨、尺骨と橈骨があるが、これらの生命体は1本の骨しかない。

もちろん私たちの知見は地球上の古生物学的進化に限定されているので、本論の考察において十分把握しきれない点があることは否めない。この生命体を自ら探し当てたわけでもない。もし誤りがあれば、その責任はすべて私に帰す。ただ私たちが地球の脊椎動物の進化パターンを熟知していることはプラスであり、本論の古生物学的叙述には自信をもっている。

私はこの生命体を「種、属、科」より上位に分類するつもりはない。彼らの遺伝的起源がどこにあるのかの調査は遺伝学者に委ねたい。

私は著書『ナスカの神秘的ミイラ：目撃証言』を書いたコンスタンチン・コロトフ博士と、ドミトリ・V・ガレッキー博士が書いた、この新種の異星生命体についての著作に恩義を負っている。私が本論のベースにしているのは、彼の著作の第三部である。また当文書の画像の大部分は会員制メディア・ネットワークであるガイア(Gaia)の録画をスクリーン・ショットして使っている。

**発見の簡略な経緯** さらに詳しい経緯は67ページを参照のこと

(訳注：CSETIのアーカイブからとった本稿にはその部分はない)。

2016年、考古学者として25年のキャリアのあるレアンドロ・ベニーニョ・リベラとその数人の友人たちが彼らの発見物をクスコに運び、インカリ研究所所長であるフランス人のティエリ・ジャミンを訪ねた。

考古学者であり歴史家であるティエリ・ジャミンはペルーの文化遺産の研究に専念していた。彼はときどき識別に助けが必要な時にリベラ氏を呼んで一緒に作業することがあった。

ジャミン氏はリベラたちのグループが幾体かの小さな身体、頭部、手を所有していると聞かされた。彼らは専門家の意見を求めている。そして発見物を公開する手助けを望んでいた。ジャミンが最初に受けた印象では、その発見物は本物だと思われた。そしてすぐにこの発見の重要性を認識した。それらの映像がインターネットにアップされ、公に知られることとなった。すぐに世界中の人たちがその発見物に興味を示した。

2016年10月ないし11月にメキシコ人のハイメ・マウサンがその画像を見た。彼は1時間のTV番組「エル・ソル・ド・メキシコ（メキシコの太陽）」で受賞歴のある調査報道のジャーナリストだ。彼が目にしたものは人間には見えなかった。彼は最初それを作り物だと思った。2017年3月にある生物学者が彼に連絡をとり、ティエリ・ジャミンと会って話すように促した。

マウサンは彼の番組でジャミンにインタビューしたところ、ジャミンの信頼性と発見物の重要性を強く感じた。

マウサンは真理追及を掲げる会員制メディアのガイア(Gaia)に連絡し、彼のチームと一緒に検体を調査する企画を持ちかけた。こうして合同調査チームが結成され、作業が始まった。しかし政府の研究所はどれもその検体調査には関わらなかった。

調査に対する批判もあったが、ある大学が検体に興味を示した — 国立大学のサンルイス・イカ大学だ。この大学はリマから約 190 マイル南方のナスカ地方にある。ジョセフィーナを除く全ての検体がイカ大学に運ばれた。ジョセフィーナを私は標準検体を選んだ。(検体は研究の便宜のために全て名前を付けられている)。

レアンドロ・ベニーニョ・リベラはジョセフィーナには非常に価値があると信じていたので、イカ大学に渡すことを拒んだ。私はそれに同意した。なぜなら発見者のリベラはそれなりの権利をもっているし、ジョセフィーナを渡さない行為も、法的に未整備な領域に属するからだ。

ナスカミイラについてガイアチャンネルで16ものドキュメントが、Youtubeでも1つのドキュメントが出され、さらにはガイア・チームとペルー当局の役人たちの討議という怒涛の日々が続いたあと、すべての調査がストップした。それはほぼ6年間続いた。なぜだろうか？それは異星人問題の隠蔽を企てる力が調査にストップをかけ

たからだ。その間まったく進展がなく、調査もなかったという事実そのものが、権力の介入を物語っている。

ガイア・チームは自分たちが調査した検体が何であるか見当がついていたが、ペルー当局にその正体を納得させることはできなかった。それは三本手指、三本足指、不釣り合いに大きい頭骨をもつヒューマノイド型のマリアが巻き起こした「環境汚染」のせいだった。マリアはマイルズ文書第二部で扱っている（訳注：CSETI のアーカイブにはパート 2 は載っていない）。

ガイア・チームには自らに不足し、意識もしていないことがある。それは化石の知識をもった古生物学者の協力がいないということだ。これまでもずっとそうだったと思う。そこで今回私が立ち上がり、この文書を書いているわけである。

## DNA

この生命体は特異な DNA をもっている。しゃがんだ姿勢の検体と、胴体のないひとつの頭部の遺伝子を調べた結果、それは地球上に知られるいかなる生物とも一致しなかった。私はウィリアム・ブラウン博士に今後の DNA 調査の先頭に立っていただくことを提案したい。彼はアメリカ合衆国でこの検体の DNA 調査をプロフェッショナル

ルに始めることができる唯一の人物だからだ。

NA-05（ナスカ異星人5）＝ヴィクトリアの DNA サンプルはカナダ、メキシコ、ロシアに届けられた。その DNA はヴィクトリアの首と尻から採取された。コンスタンチン博士はこう言っている：「ヴィクトリアの DNA は私たちが知っているすべての有機生物の DNA と全く関連性がありません。すべてというのは、人間、動物、植物、バクテリア、微生物を含むすべてということです。全然一致しません。したがって科学者にとって、これは明らかに何か異常なものです。これは驚くべきものであり、これまでに見たこともないものです。（ドキュメンタリー「ナスカ発掘」ガイアコム）」

カナダ・アルバータ州のエドモントにあるゲノミクスと分子診断学の研究所 Cen4gen（訳注：Center for gene の意味か？）がサンプルのゲノム解析を行った。このカナダの研究所は検体をたくさん入手していたので、良質のゲノム分析ができた。コンピュータによるデータ解析の結果、この DNA は人類のものと一致しないし、いかなる有機生物とも一致していなかった。この検体は未知の種だということになる。

ロシアの研究所の V.S. バラノフも同じ結論を出した。

コロンビアの遺伝子学者クララ・イネス・マルティネスは2つの頭部の内の1つから取られた検体を DNA 分析した。彼女も検体の特異性について同じ結論になった。

ヴィクトリア（訳注：女性名）はヴィクター（訳注：男性名）。

私がこのようにことを言うのは、最初の DNA 検査結果が得られたとき、ヴィクトリアが男性であることが判明したからだ。DNA に Y 染色体が含まれていたのだ。しかし本論の便宜上、私は初めに付けられた名前を今後も使用することにする。

これらの検体のうち金属の物質がインプラントされているものが 1 体以上あった。ジョセフィーナのインプラントは個人的見解としては、彼女の折れたあとくっついた鎖骨を補強するためのものだと思う。これは医学的処置にすぐれた知識があったことを示唆する。インプラントされた金属の特異な形や構造が治癒を促す一種の共鳴のような現象を起こしていたのだろうか？その答えはさらなる研究に委ねたい。

## 解説

著者の古生物学者マイルズはグリアにナスカミイラの CT スキャン画像や X 線画像を提供した人物と思われます。グリアが 2024 年 3 月に行ったプレゼンでその古生物学者のことが述べられています。

私はこの古生物学者について 2024 年 6 月のプレゼン [Youtube 「ナスカミイラの真相」](#) の 27 分 48 秒以降で述べておきました。